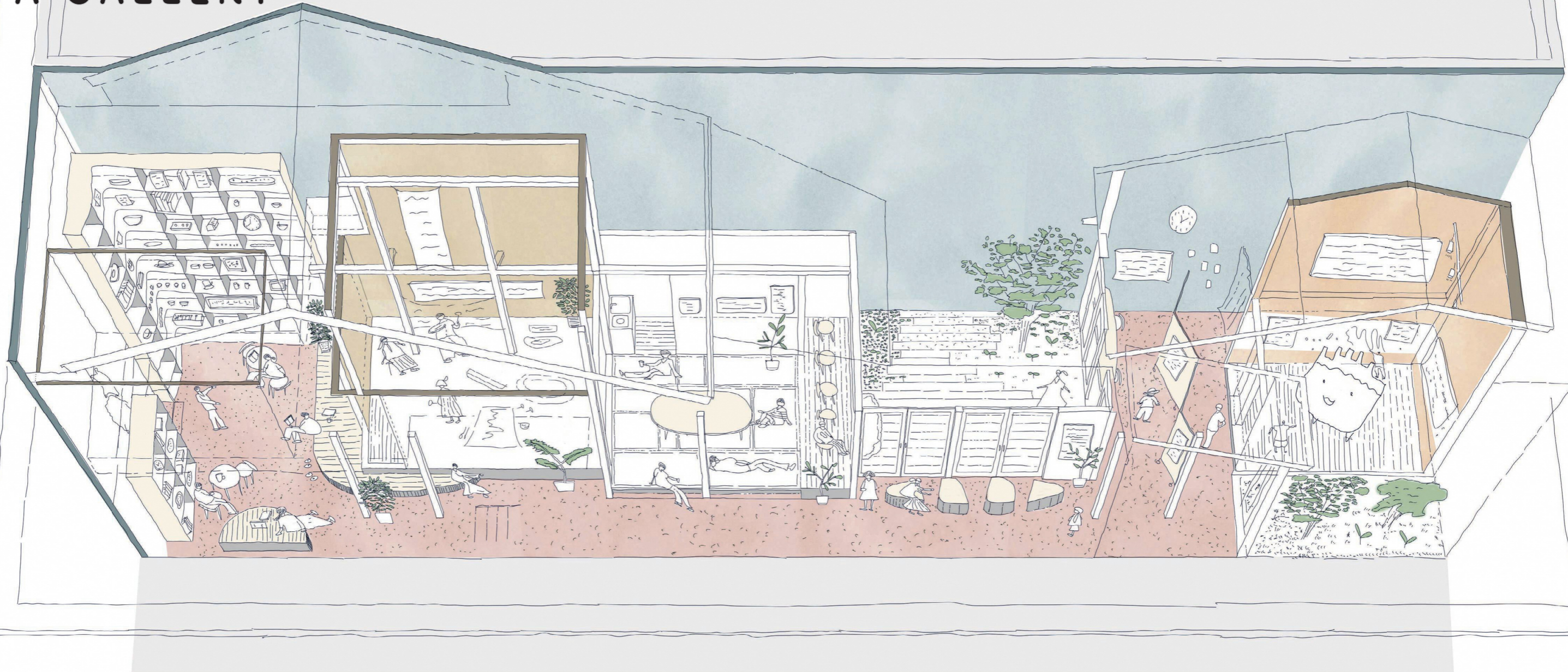


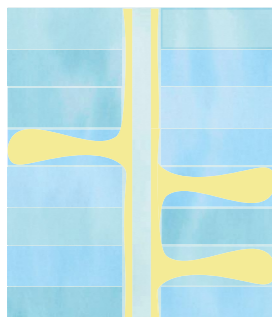
# AKIYA GALLERY



## 01 空き家を街に。小さな空間が大きく街を変える



▲街に拡がる小さな居場所



▲通りから連続する公共空間

かつて北陸街道の宿場町として発展し、魚津城・寺社郡の門前町として姿を変えながら今も残る商店街。現在は空き家が増えてはいるが、そこには人の営みが脈々と受け継がれている姿が見られます。また、周辺の地域では「タナノナカミセ」などの遊休不動産の利活用が行われ、さらに次世代へ営みが継承される機運が高まっている状態です。私達も本物件をケーススタディとして、元住居としての空き家の利活用方法を考えると同時に、そこに人の活動拠点をつくることで街に賑わいを生み、人の営みを継続・発展させるアイデアを提案します。

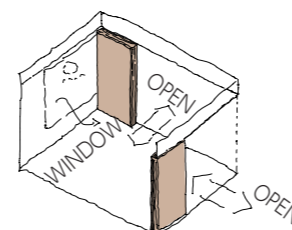
街中を歩いてみると、商店や住居が道沿いに密実に建ち並び、人の拠り所となるような居場所が乏しい様に思えます。点在する空き家は、ひとつひとつは小さい

ものの、街に広く開かれた空間に改修していくことで、小さな活動拠点が集まり、大きく街を変えることができると考えます。全国的にもマイクロパブリックスペースなど様々なネーミングでそのような人の居場所や空間をつくる試みは行われています。本提案では、その小さな空間に魚津市の地域性や街との関係性を意識した機能を入れ込むことで、既存の街の魅力を掘り起こし、持続可能な魚津市ならではの賑わいの空間をつくりだします。

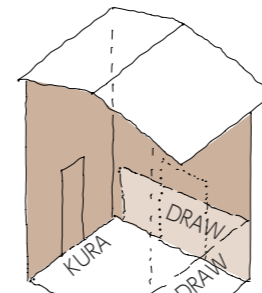
元住居としての空き家の活かし方の一例として“今ある魅力を活かす”、“今ないものを創り出す”という2つの視点を重要視しながら小さなスペースで最大限の効果を生み出す、次世代型の街の賑わいのつくり方を目指します。

## 02 通りから連続する袋小路型の建築、様々な出来事が起こる場

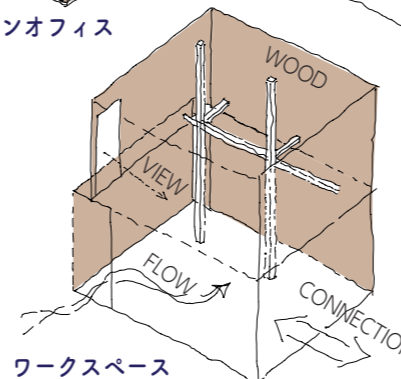
### ▼インナールームの例



オープンオフィス



蔵ギャラリー



ワークスペース

“今ある魅力を活かす”という視点から、魚津市では「魚津市美術展」・「魚津市民文化祭」という歴史の長いイベントが毎年開催され、老若男女問わず美術が市民の中に着実に根付いていると考えます。また、当該空き家の並びには老舗の画材店があります。これらを地域の魅力・既存の街との連関の手がかりと捉え、美術を核に本物件を改修することで人の活動・賑わいの拠点をつくりだします。周辺は商店などが建ち並ぶエリアで昔からの通りが形成されています。それらを建物内に引き込むことで街の通りと緩やかにつながり、通りに面して数珠繋ぎのように奥まで連続する袋小路型の居場所をつくります。さらに空き家の大半を外部化する

ことで、屋根のついた広場と捉え、誰でも入りやすい敷居の低いオープンな空間構成とします。ここでは美術鑑賞をしたり、作品製作をしたり、テーブルを囲んで作品講評に熱を帯びたり、ただぼーっとしたり・・・それぞれの目的を果たしに来た人たちが思い思いに過ごす場になります。また、予期せぬ出会いや発見の場となるサードプレイスのような居場所となることを目指します。

これは、他の空き家にも転用可能な手法です。当該空き家以外も同じように街の通りから連続する空間・機能とすることで、さらに多様な居場所、出来事が街に広がり大きな賑わいをつくりだす計画です。

### 03 インナーを重ね着するような小さな改修

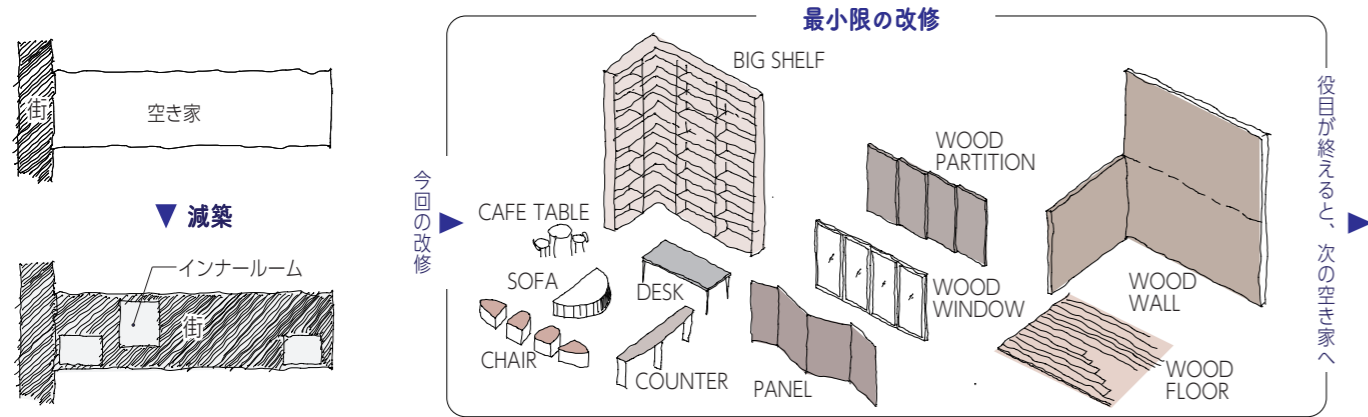
空き家の空間全てに手をつけるのではなく、改修箇所は活動の受け皿となる要の空間に絞ります。それは、まるで人がインナーを着込むような改修方法です。

“今ないものを創り出す”という視点から、街の人たちがふらっと立ち寄って美術を日常的に身近に楽しめる場として、2層吹抜の大きな空間や、

断熱された居住性の高い空間など、それぞれ3つのインナールームを外部化された空き家に組み込みました。このインナールームは、自由に作品を創作・展示・鑑賞できる場として、またフリーの芸術作家が街と関わりながら活動できる場となることで、街に賑わいを生み出すきっかけをつくります。インナールームは時には

音楽の練習室になったり、映像作品の展示室になったりと多様に化する活動の場です。

インナーを重ね着する範囲は絞り小さな改修とすることで、他の空き家への展開のし易さや、元住居の空き家はスケールの大きさから手が付けにくく活用しにくいというイメージを払拭できたらと考えます。



### 04 元住居のつくりを最大限活かし、転用性を持たせた時間のデザイン

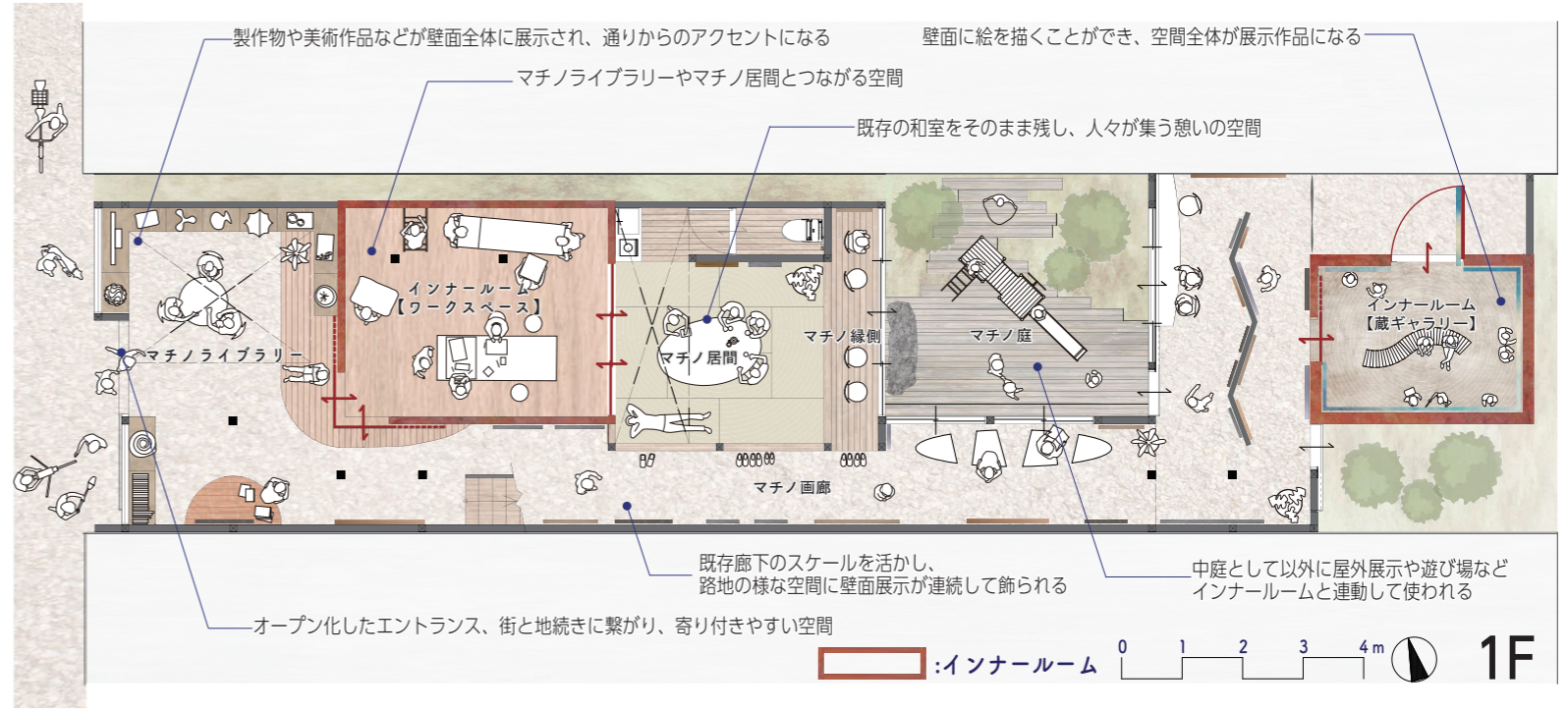
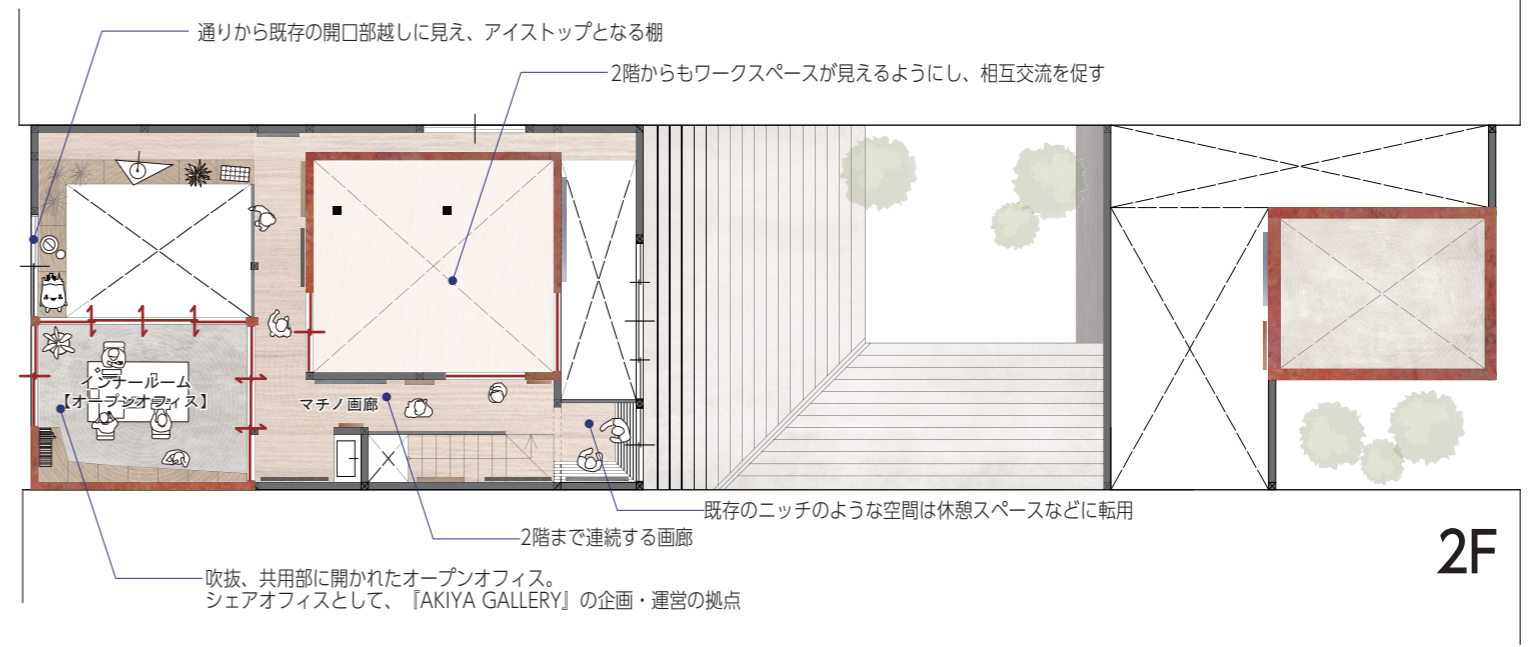
当該物件は敷地境界ギリギリまで隣家が迫り、間口も狭く、両端ともに界壁のため、外部の開口が少ないのが特徴です。幸い既存に中庭があるため、奥の空間にも採光が入ってはいませんが、間仕切りで細かく仕切られているため、十分な環境とは言えない状態です。

今回の提案では、機能や構造的に必要な箇所以外は減築により空間全体をオープンでひとつながりの空間とします。通りや中庭から風が通り抜け、自然の光をどの場所からも感じ

られるように環境面でも再構築し、居場所として必要な設えを整えました。また、元住居であるスケール感や木造である良さを活かし、変化に対応していけるような改修の仕組みを考えます。具体的には、防火性能が不要な箇所には木の建具の採用、既存の木の柱・梁・ブレースの現し、仕上材や補強材は木で行うなどです。木の素材を全面的に使うことで、仮に先に建物が寿命を迎えても、次の空き家に今回の材料を転用していくことが可能です。昔ながらのある

程度標準化された住宅（長い廊下があり、部屋が襖で連続するつくり）だからこそ、可能な転用性を持たせた活用方法です。

当該物件は、築50年近く経っており、あと何年使うことができるのかはシビアな問題です。だからこそ次世代の建築のつくり方は使うだけでなく、建物の終わり方まで考えることが、重要な命題だと考えます。ただ壊すだけでなく、延命しながら、緩やかに終わり（寿命）を迎えるような時間のデザインです。



▲通りから見る。道から連続して繋がる袋小路空間



▲マチノ画廊を見る。減築によりオープンに繋がった空間に様々な家具が配置される



▲2Fオープンオフィスを見る。可動式建具で緩やかに共用部と繋がる空間